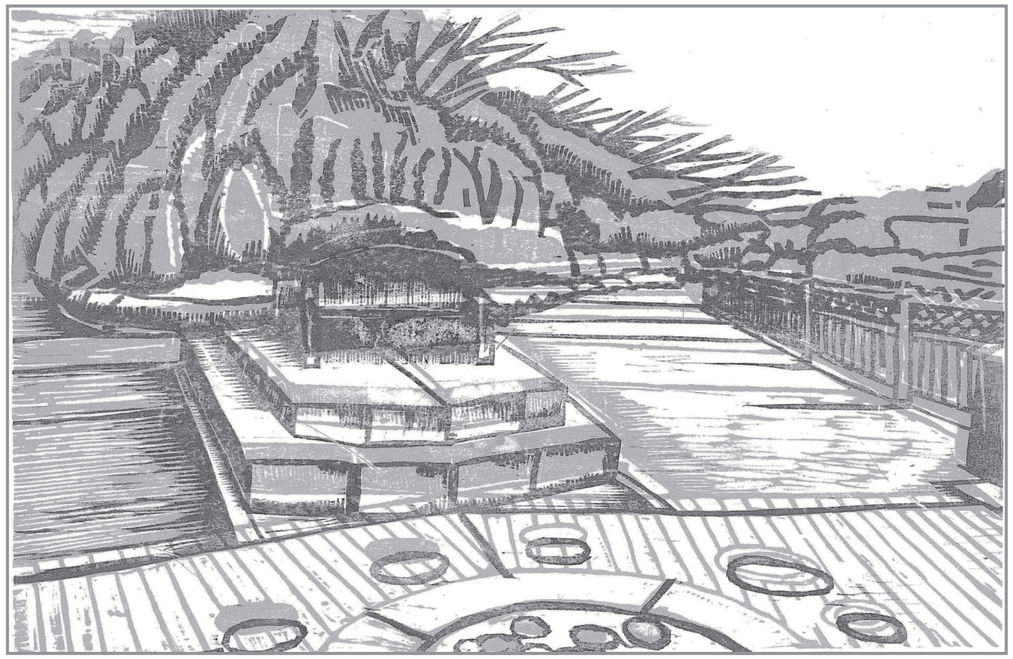
いたちかわらばん

通刊６８号　鼬川・独川 / 川原番・瓦版　'14冬号



【版画　宗森英夫】　大いたち橋・小いたち橋休憩所

春の七草

「セリ、ナズナ、オギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」春の七草を一度は聞いたことがあると思います。正月の「松の内」が終わる七日に、正月に疲れた胃腸を休めるために野草を入れた七草粥を食べる習慣があります。

これらの野草はカブ、大根を除けばほとんどが、いたち川沿いの散策路で採取することが出来ます。オギョウとはハハコグサ、ホトケノザはコオニタビラコ、スズナはカブ、スズシロは大根のことです。

科目は、セリはセリ科。ナズナ、カブ、ダイコンはアブラナ科。ハハコグサ、コオニタビラコはキク科です。身近な野菜ではニンジンはセリ科、レタス、ゴボウはキク科。ホウレンソウはアカザ科と、我々が食べている野菜は思いもよらない植物が改良されて食用になったことに驚かされます。

七草の中でも、ハコベは歯の薬として、ハハコグサは咳・痰、セリは神経痛、リュウマチ等の効能があると言われ食べられてきました。昔の人は医食同源によって病気を予防、治療をしていたようです。

秋の七草は、万葉集で山上憶良が読んだ歌が由来で、花を愛でることから「クズ、ハギ、オバナ、オミナエシ、フジバカマ、ナデシコ、アサガオの花」とされています。ここで言うオバナはススキ、アサガオの花はキキョウであると言われています。

（水・人・子）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

境木小学校（保土ケ谷区）６年２組

「学校ビオトープづくり」

スタートは、「自分たちで協力して何かをつくりあげたい」という、子どもたちの声からでした。「藻が多すぎて魚がすみにくそう」「水が入ってないよ」学校ビオトープを休み時間のたびに観察し、問題点を上げ、どうすればよいか調べる子どもたち。聞き込み隊の活躍で、ビオトープに詳しい和久井さん（いたち川 OTASUKE 隊）と連絡がとれ、協力していただけることになりました。

初めて聞く、トンボや和久井さん自身の話に興味津々、子どもたちの目はきらきら輝いています。まずは、池の中の植物や土を掘りだす作業。子どもたちは黙々と、作業に取り組みます。それから、端に竹を一本ずつ打ち込みました。そこに赤玉土を敷き詰め、ヤナギを植えて日陰をつくります。それから、セキショウや水草を植えていきます。ひとつ一つの作業に意味があることがわかり、子どもたちは、教室の授業ではなかなか見ることのできないとびきりの表情を浮かべていました。

教室にも、さっそくミニビオトープを作り、自分たちで考えて生き物を入れ、毎日ガラスに顔を近づけて観察。生き物の命を大切にし、ともに生きていることを喜び、その環境を守ろうとする姿を感じることができました。ビオトープ作りを通して、これまで以上に環境に目を向けたり、自然や生き物の命について、自分にできることをそれぞれが考えています。

（担任　平野紋子）

境木小学校での「学校ビオトープづくり」の指導は、本郷小学校に在職されていた村田先生からの願いでした。河川や森林に近い学校の子供たちは自然を身近に感じて生活していますが、そうではない学校では、自然を求める気持ちが強く、学校内に造りたいという要望がありました。

（注）ビオトープとはドイツ語の生物（ビオ）と場所（トープ）の合成語です。生物が生息できるように水辺や植物を配して、トンボ等を誘致するようにしたものです。　（和久井　征治）

◇◆「いたち川 OTASUKE 隊」◆◇
隊員募集

いたち川 OTASUKE 隊は「いたちかわらばん」の発行など、いたち川への関心を高め、愛護意識を広めるためのボランティア活動をしています。

いたち川が大好きなあなた、一緒に活動しませんか。

●活動日

毎月１回 (原則として第４金曜日)、午後２～４時に栄区役所で定例会議を開催

● 活動内容

・「いたちかわらばん」原稿執筆、取材

・「いたち川散策 MAP」作成のための現地調査

・いたち川関連イベントへの協力　など

● 募集人数　若干名

● 応募方法　往復ハガキまたはＥメールに、住所、氏名、年齢、電話番号、メールアドレス (ある人のみ)、志望動機等を書いて、３月 20 日（金）までに OTASUKE 隊事務局（栄区役所区政推進課企画調整係内）へ。

＜送付先＞

１）往復はがき　下記（奥付を参照）

２）Ｅメール：sa-kikaku @ city.yokohama.jp

＜現在の隊員＞

☆宗森　英夫（隊長）☆和久井　征治

☆木村　賀数　　☆杉浦　尚子

☆生越　勝栄　　☆草本　勝次

☆草本　和子　　☆佐藤　信夫

境木小学校、６年生のビオトープづくり

発行年月 2014年12月　通刊68号

発行：独川OTASUKE隊　（いたちがわおたすけたい）
OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247-0005　横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161　FAX 045-894-9127
栄土木事務所下水道・公園係　〒247-0007　横浜市栄区小菅ケ谷1-6-1
TEL 045-895-1411　FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

平成 26 年度栄区区民講座
（主催：タッチー倶楽部）開催される！

「タッチー倶楽部」は、栄区の「みんなが主役のまちづくり協働推進事業」に認定された区民の団体で、いたち川をテーマにした講座の開催には、「いたち川 OTASUKE 隊」も協力しています。

そして、今年度の全６回の講座が盛況の内に終了しました。

第１回	10/10	いたち川の自然との共存・新しい川づくり
第２回	10/23	荒井沢川 HASHI めぐり
第３回	11/7	公開講座（富山いたち川との交流会） 詳細は右ページ参照
第４回	11/21	古墳時代後期の墓制
第５回	12/8	証菩提寺～光明寺
第６回	12/19	武蔵野国～相模の国

「いたち川 OTASUKE 隊」は第１回の講師を務め、第３回の公開講座には７名が参加しました。第１回の参加者は 50 余名、講座は２部構成で行いました。

【第１部】いたち川の川づくりに関連する状況など

最初に、河川用語の説明や歴史など初歩的な内容から講義がスタートしました。

いたち川の名前の由来は、室町時代、戦に赴く際に鎌倉の屋敷から威風堂々と鎧を付けて出立して、いたち川のほとりで軽装になり旅立つ場所「出で立ち川」が転じて、「いたち川」となったと言われています。

いたち川の河川整備の歴史については、1970 年以前は川幅も３ｍほどで、豪雨の時には雨水が一気に川に流れ込むと氾濫状況に陥り、地域の人からは「暴れ川」と呼ばれていました。

その後、河川改修が行われ、溢れることは少なくなりましたが、水深が浅くなったことで水質の劣化が進み、生物が棲息しなくなってしまいました。そこで、試行錯誤の末、治水工事だけではなく、自然と調和した川づくりに挑んだことを説明しました。

さらに、一歩踏み込み「ワンド」の説明です。ワンドは河川構造物によって囲まれて池のようになっている地形で、プランクトンを発生させ、水の汚れをプランクトンに食べてもらい水の浄化を図ります。さらに、ワンドにはプランクトンを餌とする小魚、小魚を食べる鳥類といった生き物のつながりを作り出す工夫がされています。

受講者を引き付けたのが、矢沢堀小川アメニティでの取組です。この地域の土地は、鉄分濃度が比較的高かったため、ある程度の鉄分を除去する必要から水車を設置し、さらに川に空気が入ることにより、様々な生き物が棲み易くなるようにいたました。

～いたち川の生き物たち～

鳥類では、フクロウの仲間であるアオバズクやオオバン、ユリカモメ、カワセミなど。魚類ではコイやヨシノボリなど、多くの生物が棲息し、河川沿いには、ソメイヨシノ、コブシ、ケヤキなどの樹木が植えられています。いたち川を散策し観察することで、四季折々の驚きがきっとあるはずです。

その他にも、初夏にはホタルを見ることができる瀬上沢や荒井沢市民の森、緑豊かな自然が残る瀬上市民の森、文化施設の古墳群など栄区にある貴重な遺産を紹介しました。

いたち川を含め栄区にはたくさんの魅力的なスポットがあります。身近な生活のすぐそばに自然があることを改めて伝えました。きっと今までと違ったいたち川や街の見方ができるでしょう！

【第２部】植物の知識の解説

事前に「植物の知識」に関する問題用紙を参加者に配布し、問題ごとに関連する植物の種類や特色などを解説しました。

（問１）春の七草「スズナ」とは（カブが正解）
春の七草、秋の七草の覚え方などを解説

（問２）食虫植物の問題で「ムシトリナデシコ」は食虫植物ではないことを解説

（問３）夏目漱石の作品「虞美人草」の草花の名前「ヒナゲシ」と由来の解説

（問４）冬に咲く「ヤブツバキ」は鳥媒花であること。
そのほかの風媒花や虫媒花などの解説

（問５）「イチョウ」に関する文豪ゲーテにちなむ問題と解説

（問６）友禅染の下絵に使用される野草「ツユクサ」の解説

（問７）「スイセン」についてのギリシャ神話の解説など。

最後に、企画構成されました「タッチー倶楽部」の皆様には有意義な時間を過ごすことができましたことを感謝致します。　（水・人・子）

公開講座　いたち川サミット
～富山いたち川との交流会～

11 月７日（金）１０～１２時「いたち川サミット」が本郷台駅駅前「あーすぷらざ」で開催されました。

二つのいたち川

栄区を流れるいたち川の他に、富山市にもいたち川があるのをご存知ですか。この公開講座のために富山から来訪された４人の中には、朝の飛行機で着いたばかりの人もいて、富山市石倉町を流れる「いたち川」が市役所の近くで松川に合流し、神通川に流れこんで富山湾に注ぐこと、歴史を背景に、数々のお地蔵さんが川沿いに祀られていること、毎年７月 23・24 日に灯篭流しが行われていることなど、交代で説明されました。そしてカヌー下りもできるし、どんどこ祭りもあるので是非見に来てほしい。と交流を呼びかけていました。

栄区のいたち川も、水辺愛護会やいたち川 OTASUKE 隊など、直接関わる人たちばかりでなく、川べりを散策する人、買い物や通勤通学の人々、早朝のバードウォッチングや写真撮影に来る人など関心をもっている人は数多くいます。また、夏には子どもたちが、「いかだまつり」を楽しみにしています。

この講座が、老若を問わずみんなが今後のいたち川を考えることのきっかけになれば、自然環境をよくすることにつながり、町の活性化につながっていくでしょう。同じ「いたち川」の名を持つという縁結びで、来年３月の北陸新幹線の開通を機会に住民中心の交流がこれから盛り上がっていくことを期待しています。　（うぐいす）

「いたち川サミット」を受講して

富山市の「いたち川」のことを知ることができ、とても面白く有意義でした。私が興味深く関心を持ったのは、富山「いたち川」の過去の自然災害と現在までの歴史と景観です。

【配布資料】いたち川地蔵尊めぐりマップから抜粋
いたち川は富山市の中心部を流れる長さ 13 ｋｍの河川。佐々成政が入国前から存在していたものの、天正８年（1580 年）の氾濫によって一帯は泥海と化して埋没。成政が濁流の流路を生かしていたち川の治水事業に取り組んだ。これにより富山城の守りを固め、また、水害の防止や原野の開拓にも大いに役立った。

現在のいたち川は、常願寺川から水を取り入れ松川と合流し市街地を北西に流れ、神通川に流入しています。今回の交流会で、いたち川の地理と歴史的背景を学びました。

富山市の市街地は、立山連峰から流れる水と土砂による沖積平野であり、清水が湧き、自然の恵みにより人々の営みがなされてきたことが良くわかりました。天正８年（1580 年）の大氾濫に加え、安政５年（1858 年）の飛越地震では、山が崩壊し、常願寺川上流の立山カルデラに４億㎥もの土砂が堆積、その後２回にわたり土石流が発生し、２億㎥もの土石が流出する災害となったそうです。

栄区の「いたち川」にもいろいろな歴史と景観があります。現在の住人の多くは昭和 40 年代以降に転入してきました。「いたち川を通じて地域のことを学習しようという方も多く居られます。私たち「いたち川 OTASUKE 隊」が発行している「いたちかわらばん」も、そんな思いから 15 年余に渡っていたち川の魅力をお届けしているものです。

いたち川のご縁で「タッチー倶楽部」さんや、富山市と交流する良い機会になりました。富山の観光名所を訪ねてみたいとも思います。繋がりがさらに発展していくことが楽しみです。

（うめおきな）